

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007 年度～2009 年度

課題番号：19730525

研究課題名（和文）：学校場面における子どもの逸脱行動と現実・選好学級環境認知の関連

研究課題名（英文）：Disparity between the perceptions toward actual and preferred classroom environment among Japanese juvenile delinquents.

研究代表者：平田 乃美(Sonomi Hirata)

白鷗大学・教育学部・准教授

研究者番号：20308224

研究成果の概要（和文）：本研究は、学校場面における子どもの逸脱行動を理解する一視点として、現実の学級環境と子どもが好ましいと捉える選好環境の認知の乖離を検討するものである。一般中学生、少年鑑別所収容生徒を対象として、独自の学級環境評価尺度を実施した結果、鑑別所群は一般群以上に、現実と選好する環境の乖離が大きく、教師との親密な関わりや支援を求めていることや、学業の負担をより強く感じていることが明らかとなった。結果から、現実・選好フォームによる評価手法が非行行動の早期発見・予防に活用できる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study deals with the differences in the perception towards classroom environments between secondary students and juvenile delinquents in Japan. The actual and preferred forms of the original classroom environment scale were both administered to 121 students from secondary school, and 87 correctional institution residents. The results were analyzed using the two-way ANOVA with two-by-two factorial design. The independent variables are Forms (Actual/Preferred) and Groups (Secondary school students/Delinquent students). Statistically significant differences were found between students' actual and preferred environment on Teacher Support, Sense of Isolation, Deviation from Class, and Order & Organization. Concerning Teacher Support, juvenile delinquents reported that they are asking closer relationship with a teacher more than non-delinquents. Also it was shown that the delinquent students felt the stronger pressure of the Achievement Responsibility. These findings are consistent with the arguments of several major research based on Hunt's (1975) Person-Environment fit theory (Stern, 1970 ; Fraser & Fisher, 1983), and finally lead to the conclusion that it is beneficial to measure the delinquent students' perceptions of actual and preferred classroom environment to restrain them from misconduct and maladjustment to school.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	300,000	1,900,000

研究分野：環境心理学

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：非行少年、学級環境尺度、環境心理学、中学生、少年鑑別所

1. 研究開始当初の背景

学校・学級風土や文化特質（エトス）の研究は、その重要性が指摘されるようになって四半世紀を迎える。特に米国においては、第二次世界大戦後の人口増加、1960年代の公民権運動の高揚、1975年の障害児教育の一般教育への統合、出生率や教育予算の変動等、学校をとりまく社会的要因が、学校を媒介して子どもの学習に負の影響をもたらしたとの世論を背景に、学校の風土・文化の研究が重視されるようになった(Sarason & Klaber, 1985)。さらに、米国では教育行政の地方分権主義や学区制から地域差・学校差が生じやすく(矢野, 1997)、教育環境測定への関心は現在も高い。

学校環境研究には、教師や子どもの知覚・認知を重視する立場と、物理的・生態学的な学校要因の効果を重視する立場がある。前者は、社会心理学者によるグループダイナミックスの「集団の雰囲気」研究にその根源をもち、やがて、欲求-圧力モデル(Murray, 1938)を基盤とする社会的風土の研究として発展を遂げた。

1960年代以降、子どもの学校環境に対する知覚・認知を測定する指標が多数考案され、心理学的測定手法を用いた教育環境尺度も、米国を中心に数多く開発された。日本でも、欧米で標準化された環境尺度や独自の測定尺度の利用が報告されており、学級風土質問紙の結果を教師の学級経営に活用する試みも行われている(伊藤・松井, 2001)。我々もこれまでに、少年院と一般高等学校の教育内容の差異が生み出す社会的環境(生徒の組織化の程度、集団の規範等)の比較研究等を行ってきた。しかし研究開始当初の時点でも、教育環境の測定尺度は、学校の文化特性やカリキュラム等の要因が学級全体の風土に及ぼす効果を測る目的で利用されることが多く、学校場面における子ども一人ひとりの内面や態度、不登校や授業妨害・対教師暴力等の逸脱行動を理解するための利用は少ない状況にあった。

2. 研究の目的

このような研究開始当初の背景をうけて我々は、米国で既に標準化されている学級環境尺度 CES (Trickett & Moos, 1974) 及び矯正施設環境尺度 CIES (Moos, 1974) 等の項目を用いて、一般中学生はじめ非行・不登校等の行動特性をもつ子どもの学校・学級環境に対する評価を測定してきた。それらの結果では、例えば、不登校・非行中学生が学級環境において非常に強い「孤独感・疎外感」を抱いていることや、少年鑑別所収容中学生では「教師への否定的な態度」は教室において教師が自分への個人的な関心を示すか否かで形成されること等が明らかとなった。我々はこれらの知見から、さらに仮説を進め、子どもが学級環境をどのように認知・評価しているかという情報は、学級風土や教育環境の現状改善だけではなく、子どもの不登校や教室における授業妨害・破壊的行動、学校・教師に対する攻撃性や否定的な態度を早期発見・予防する生徒指導や学級作りのための情報として活用できると考えるようになった。

したがって本研究の目的は、学級環境認知調査から得た情報を、学校場面において逸脱行動を示す子どもたち一人ひとりの理解と早期指導に活用する可能性を検討することである。

3. 研究の方法

初年度はまず、少年鑑別所法務技官(臨床心理学専攻者)との協力関係のもとで考案、少年鑑別所収容中学生を対象として実施している学級環境尺度 CES : Classroom Environment Scale (Trickett & Moos, 1974) の日本版尺度 (Hirata & Sako, 1998) のデータ分析を行った。日本版学級環境尺度は、米国で標準化された CES を、日本の中学校環境の測定に適した構成次元及び項目内容に修正した尺度である。

次年度は、スクールカウンセラー配置校の一般中学生を対象とした調査および、これまでに小・中学校、少年鑑別所、

不登校学級、公立・私立高等学校、大学・短期大学の児童・生徒・学生を対象に実施してきた調査データを「子どもの学校生活への適応と学級環境認知における現実・選好の乖離の関連」という視点から再分析した。

最終年度は、すべての調査データの総括とともに、初年度に分析した少年鑑別所収容中学生を対象とした調査について、学校場面における逸脱行動と学級環境認知における「現実と選好の乖離」に着目した分析をおこなった。

具体的には、少年鑑別所の実施データを因子分析して、「教師の支援」「学業負担」「教師の管理」「競争」等、因子の構成概念的妥当性を検討した。抽出された各因子の信頼性については、信頼性係数 (Cronbach's α) を算出した。これらの手続きを経て構成された尺度を用いて少年鑑別所収容中学生と同時期に調査を実施した一般中学生のデータの比較を行った。非行・一般の群を要因とした分散分析を用いて、学校において生徒間及び対教師暴力等の逸脱行動を行った少年達の学級環境認知の特徴解明を試みた。一方、特に非行群のデータにおいて、現実環境と選好環境の間の差異が大きかった測定次元・項目について検討した。

4. 研究成果

本研究の主な成果は、下記3点の論文として発表した。それぞれの論文要旨は次の通りである。

【発表論文1】

「学校臨床心理学の実践に対する子どもの理解と評価-スクールカウンセラー・相談員を複数配置した公立中学校の事例研究-」

本稿では、スクールカウンセラーの効果的な活動に関わるとされるいくつかの要因の関連について、子どもの視点に着目して検討することを目的とした。スクールカウンセラー配置校の一般中学生121名を対象に調査を実施して、子どもの周辺人物に対するイメージ、学級環境評価、相談に対する態度を測定した。主な結果として、スクールカウンセラーの相談相手としてのイメージでは、(1)教師と近似する、(2)心の専門家としての期待が高い、(3)守秘義務はほとんど理解されていない、等が示された。学級環境評価と人物イメージでは、

(4)スクールカウンセラー・両親・教師等大人全般に親和の高い子どもは、教師の支援についても評価が高い、相談に対する態度では、(5)悩みを他者に相談しない理由によって、学級での孤独感が有意に異なる、等が示された。特に、悩みは人に頼らず自力で克服すべきという信念をもつ子どもが、実際に相談相手のない環境にある場合に、孤立感が最も高いことが示された。これらの結果から、学校生活における相談可能な人物の存在が健康な生徒にも有益に作用する可能性、及びスクールカウンセラーの外部性・専門性に関する生徒への周知の必要性について指摘した。

【発表論文2】

「子どもの適応と学級環境認知における現実と選好の乖離について」

本稿では、教育環境測定指標の研究背景の整理をおこない、過去10年間に小・中学校、少年鑑別所、不登校学級、公立・私立高等学校、大学・短期大学の児童・生徒・学生を対象に実施してきた調査データを「子どもの学校生活への適応と学級環境認知における現実・選好の乖離の関連」という視点から概観した。現実および選好環境測定フォームを用いたこれまでの研究成果について、「大学の授業評価-学力とニーズ-」、「特色ある公立高校-総合選択制の風土-」、「うまく機能しない、難しい学級-教師の手応えの可視化-」、「少年鑑別所-非行少年の学級環境認知-」の4つの実践例を通して、今後の課題を検討した。

【発表論文3】

「非行少年の学級環境認知における現実と選好の乖離について」

本稿では、一般および少年鑑別所収容少年の学級環境に対する評価を調査した。一般中学生121名、少年鑑別所収容生徒87人を対象として、独自に構成した現実・選好フォームによる学級環境評価尺度を実施した。学級環境(現実/選好)と個人属性(一般群/非行群)を要因とした2要因分散分析の結果、「教師の支援」「学級での疎外感」「授業からの逸脱」「規律の乱れ」の因子において、一般中学生・少年鑑別所収容少年ともに現実・選好環境の間に有意な差が認められた。「教師の支援」「学業の負担」では交互作用が認められた(Fig.1-Fig.5参照)。

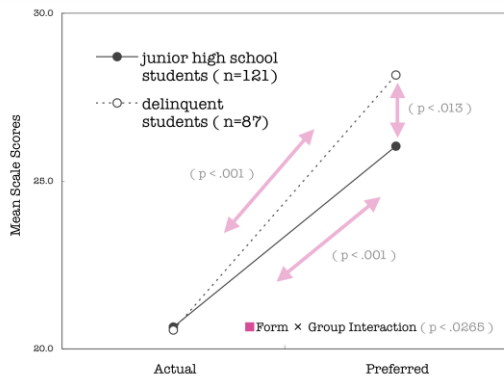


Fig. 1 教師の支援

非行群・一般群の間で現状の教師の支援に対する評価には差異はないが、好ましいと考える状態においては、非行群は一般群以上に、教師の援助を期待する程度が強い。

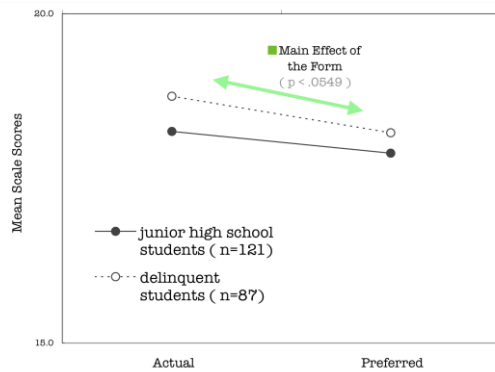


Fig. 2 学級での疎外感

非行群も一般群も、現状よりも疎外感や孤独感の少ない学級環境を望んでいる。

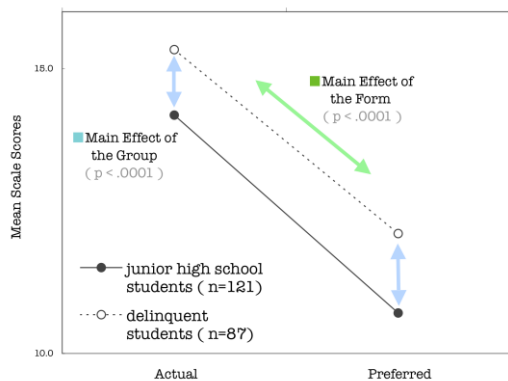


Fig. 3 授業からの逸脱

非行群も一般群も、現状よりも逸脱する生徒の少ない授業を望んでいる。一方、非行群は現状で一般群以上に授業についていけなかったり退屈したりする程度が高く、授業中についていけないことを許容する程度が一般群よりも有意に高い。

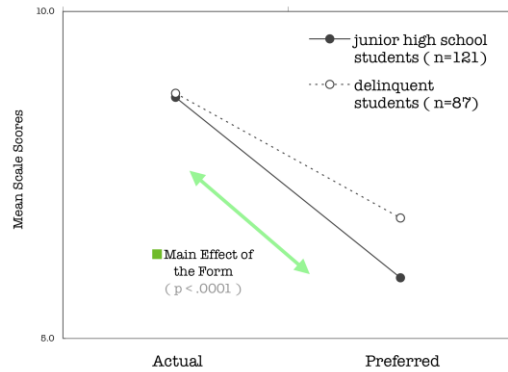


Fig. 4 規律の乱れ

非行群も一般群も、好ましい学級環境として、現状よりも騒ぎや生徒同士のもめごと等のドラブルの少ない状態を望んでいる。

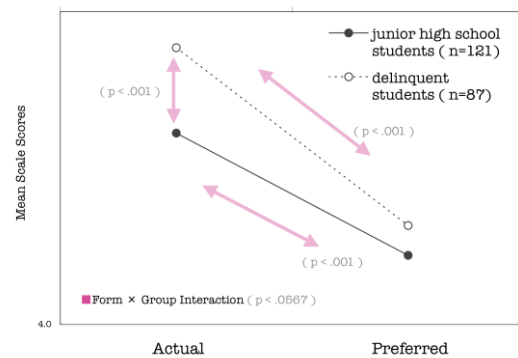


Fig. 5 学業の負担

非行群・一般群の間で望ましいと考える学業負担の程度には差異はないが、現状では非行群が一般群以上に負担を重く感じている。

上記の通り、鑑別所収容生徒が一般中学生以上に現実と選好する環境のギャップ（乖離）が大きく、教師との親密な関わりや支援を求めていることや、学業の負担をより強く感じていることが明らかとなった。

本研究では、非行行動のみならず、さまざまな学校場面（大学、指導困難な中学校学級、総合選択制高校）における子どもの問題行動と、学級環境認知における現実・選好の乖離との関連が認められた。

これらの結果は、Hunt (1975)の人間-環境適合説(Person-Environment Fit Theory)に基づく主要先行研究(例えば、Stern, 1970; Fraser & Fisher, 1983)の知見とも合致しており、現実・選好学級環境の評価手法が非行・逸脱行動の早期発見・予防のための生徒指導に活用できる可能性が示唆されたといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 平田乃美・大浦宏 (2009) 「非行少年の学級環境認知における現実と選好の乖離について」犯罪心理学研究(査読有), 47(1), 47-57.
2. 平田乃美・佐古順彦 (2007) 「子どもの適応と学級環境認知における現実と選好の乖離」白鷗大学教育学部論集(査読無), 3(1), 109-131.
3. 平田乃美・渡邊亮子 (2007) 「学校臨床心理学の実践に対する子どもの理解と評価-スクールカウンセラー・相談員を複数配置した公立中学校の事例研究-」白鷗大学教育学部論集(査読無), 1(1), 163-188.

[学会発表] (計3件)

1. 平田乃美 (2008年5月) 「教育環境研究における生態学的心理学」『米国クレアモント大学院アラン・ウィッカー名誉教授(Allan W. Wicker) キーノートスピーチ&ワークショップ』人間・環境学会第16回大会, 武蔵野大学.
2. 平田乃美 (2007年9月) 「子どもたちによる学級環境の評価-現実・選好フォームの適用事例-」ワークショップ『学校環境への環境心理学的アプローチ』日本心理学会第71回大会, 東洋大学.
3. S. Hirata, M. Ishikawa, & D. L. Fisher (2007年4月) Evaluations of Actual and Preferred Classroom Environment among Japanese Juvenile Delinquents. American Educational Research Association : AERA. (米国教育学会シカゴ大会), Annual Meeting, Chicago, U. S. A.

6. 研究組織

- (1) 研究代表者 平田乃美 (Sonomi Hirata)
白鷗大学・教育学部・准教授
研究者番号 : 20308224

以上